

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年度目)

1. 研究課題

(和文) 灌頂と即位の文化史

(英文) Unction and Coronation

2. 研究代表者

(氏名) 藤井 正人

3. 研究期間

平成23年4月から平成26年3月まで

4. 研究目的 (400字程度)

本共同研究は、共同研究「王権と儀礼」(2005.4-2011.3)を進展させるため、テーマを新たに発足させるものである。前共同研究では王権とそれに関わる儀礼全般を対象としてきたが、この共同研究では、古代インドなどにおいて即位や入門の儀礼で中心的な行為となっている「灌頂」に焦点をあて、その行為の基本形態、類型、変化、伝播、異文化との混交などに関して、文化史的アプローチから研究する。広範囲の地域と時代にわたる文化事象として、古代インドの、王即位式をはじめとするさまざまな祭式に現れる「灌頂」から、インド、中国、日本の仏教の入門入信儀礼における「灌頂」、さらには、天皇の即位儀礼としての「灌頂」などが研究の対象となりうる。研究方法としては、各種事例の比較研究を進めるとともに、他分野の研究者に負担をかけない形で文献資料の基礎研究をも行なう。具体的には、課題に関する研究報告を集中的に行なう「研究集会」と、古代インドの王即位式に関するサンスクリット資料の校訂と訳注を行なう「会読」という二種の研究会を、切り離した形で開催して研究を進める予定である。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

初年である本年度は、研究基盤と整えるために上記二種の研究会のうち、「会読」を中心に共同研究を行なった。灌頂儀礼が詳細な形で現れる古代インドの王即位式(ラージャスーヤ)に関する文献研究のために、ヴェーダ祭式文献の中から、成立年代の比較的古いブラーフマナ文献(祭儀書)と新しいシュラウターストラ文献(祭式綱要書)から、未翻訳の『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』と、文献および学派伝統の上でそれと関係のある未出版・未翻訳の『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』を取り上げ、両文献の当該箇所を班員が共同で会読・分析し、英語による訳注の作成を続けている。写本のみで知られている『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』に関しては、パームリーフ(貝葉)写本の撮影画像をプロジェクターで映して各写本の読みを詳細に点検しながら、原文の確定を行なっている。なお、本年度、研究代表者が5月から半年間、外国の大学へ出張していたために、研究会は4月と12月から3月の間

に計6回開催した。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

本年度の研究会では、古代インドの灌頂と即位の基礎資料となる『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』(TB)と『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』(VadhSS)の王即位式(ラージャスーヤ)の箇所(の)の会読と英語による訳注の作成を行なった。本年度の各研究会での研究内容は以下のとおりである。なお、両文献の当該箇所は、前共同研究において一度通読しており、本共同研究では厳密な再読を通して英訳注を作成している。

2011年 4月 1日 VadhSS 10.15.1-37 の会読と分析

2012年12月 9日 TB 1.7.3.1-4 の再読と英訳注作成

2012年 2月10日 TB 1.7.3.4-8; VadhSS 10.4.16-32 の再読と英訳注作成

2012年 2月24日 VadhSS 10.34.33-42 の再読と英訳注作成

2012年 3月 9日 TB 1.7.4 の再読と英訳注作成

2012年 3月23日 VadhSS 10.5 の再読と英訳注作成

両文献の王即位式(ラージャスーヤ)の箇所(の)の約3分の1に対して、英語の訳注を作成した。また、原文と訳文の間で用語および文体の対応を統一させるために、訳文表の作成を並行して行なった。

7. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

本共同研究ホームページの開設 (<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~kanjo>)

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区分	所属機関数	参加人数	延べ人数
学内	2	6	30
国立大学	2	3	14
公立大学			
私立大学	1	1	6
大学共同利用機関法人			
民間・独立行政法人等			
外国の研究機関			
(うち大学院生)	(1)	(1)	(5)
計	5	10	50

※当該年度の共同利用・共同研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例)

- ・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合) : 参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

論文数	4
上記のうち国際学術誌に掲載された論文数	0

※研究者がファーストオーサーであること。学内の紀要等に発表されたものを除く

なお、高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文がある場合、その雑誌、掲載論文、そのうち主な論文の詳細等

掲載雑誌名等	論文名	発表者氏名